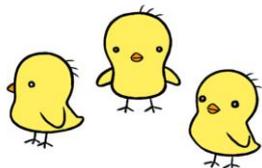


# ひよこだより



都立大塚ろう学校 乳幼児教育相談  
平成31年2月6日 NO. 11

## 愛着を土台に — 夢に向かって生きる力を —

お子さんがお母さんに対して抱く愛情のきずなを「愛着」と言います。愛着は0歳から3歳までの間に形成され、愛着の対象である母親がそばにいないくても、母親のイメージを自分の中に内在化できるようになり、それは子供が困難を乗り越えていくための力となり、その後の人生を健やかに過ごすための基盤をつくっていきます。

精神分析家のボウルビーは、「乳幼児期の正常な愛着は、人が健康に発達するうえで重要である」という愛着理論を提唱しました。「愛着は徐々に発達し、乳幼児は、自分のことを強く賢い存在であると認めてくれ、また不安や苦痛を取り除いてもらえるような相手を求める傾向がある」としました。

精神分析家のエリクソンのいう、自己と他人に対する信頼である「基本的信頼」、自己肯定感、自信なども、このまだ記憶に残らないような3歳までの親との関係性に源があり、この時代にそれらの基礎が築きあげられます。

児童精神科医の佐々木正美は、「母子の手帖」という連載の中で、次のようなことを書いています。

<子供は親子間の愛着形成から、人を信じて、自分を信じていきます。子供は幼い頃に親から無条件に愛されるという「根拠のない自信」によって、人と自分を信じることができ、人間関係が円滑に進められるようになります>

<何よりも「親が望む子ども」に育てるのではなく、「子供が望んでいる親」になる気持ちを忘れないこと。そして、成果を急がず、ゆっくりと育てる>

聞こえない・聞こえにくいお子さんが「愛着」をもてるようにするには、子供に寄り添い、子供が分かる方法でコミュニケーションをとることが何より重要です。そのためには、お子さんをしっかり抱きしめること、そして手話を使って「伝わる実感」を毎日少しずつ、着実に体験していくことが大切と考えます。

しかし「ただ手話を使って話しかければ良い」というわけではありません。コミュニケーションとは「お互いに共有する」という意味です。手話を使いながら、子供の心に寄り添い、共感的なコミュニケーションをとることで、お子さんはお母さん、お父さんに対する愛着の形成や基本的信頼を築くことができますようになります。



乳幼児教育相談ひよこ組は、「コミュニケーションをどのようにとっていけば良いのか」を「保護者が学ぶ」ところです。どのように接すれば、聞こえなくても、聞こえにくくても、お子さんにきちんと伝わるのかを、一人一人のお子さんの性格や個性に合わせて、学んでいただくところです。

また、「聞こえない・聞こえにくいとは、どういうことか」を学んでいただきながら、保

護者御自身の理解を深めるお手伝いをさせていただくとともに、「聴覚障害と共に生きていく」という価値観を共有し合う場所でもあります。乳幼児教育相談に通っている間に、そこで出会う、社会で生き生きと活躍している成人の聴覚障害者を一つのモデルとしていただければと思います。やがてお子さんが自分の障害に向き合うときに、お子さんたち悩みや葛藤も全て受け止め、お子さんの未来を100%信じて応援し続けられる親御さんでいていただければと願っています。



「聞こえる、聞こえない・聞こえにくい」にかかわらず、子供は皆、愛着を土台に着実に成長していきます。お子さんが、将来自分の力で自分の夢に向かって力強く歩めるようになるため、その基盤となる愛着を育てる乳幼児期の「今」を大切に、そして子育てを楽しみながら進めていただけるようにと願っています。 (文責 関根)